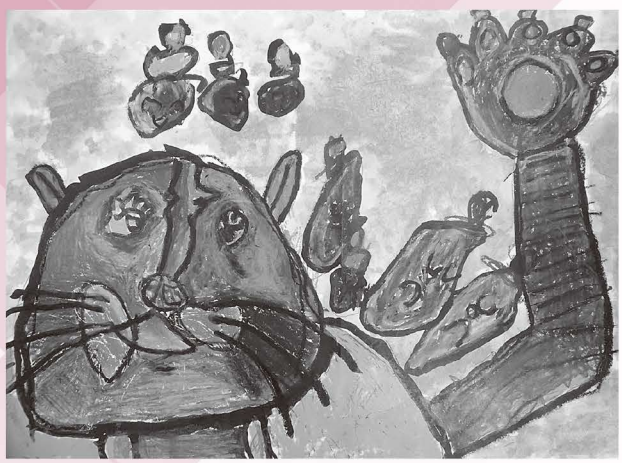
恵那市教育研究所だより
No.276
令和5年
8/3

えな



「どんぐりと山ねこ」
恵那北小学校　2年生　町野　来実

恵那市教育研究所
http://www.ena-gif.ed.jp/
恵那市長島町正家一丁目1番地1 恵那市役所西庁舎4階
TEL(0573)26-2111　FAX(0573)26-2155

「夢」のある学校に

東濃教育事務所長　中村　康男

５月８日から新型コロナの感染症法の扱いが５類に移行し、これまで制限のあった教育活動がコロナ禍前のようにできるようになり、学校に活気が戻ってきているように感じます。学校は、子供たちが豊かな人生を送ることができるよう、その基盤となる力を培う場所であり、仲間や先生との学校教育活動を通して成長を実感するとともに、夢や希望を膨らます場所です。子供たちにとって、魅力ある学校であることは、私たち教育に携わる者の願いでもあります。

今年度、東濃教育事務所では「人間尊重の気風がみなぎる東濃の教育を推進する～東濃の宝である全ての子供の主体的な学びと成長を支える教育の推進～」を方針に掲げ、子供たちを取り巻く様々な課題に対し、市教育委員会と連携を図りながら、学校への支援を行います。

ここでは今年度の６つの重要課題のうちの２つについて記載します。

■いじめ・不登校の未然防止

「令和３年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」から、本県では、いじめの認知件数は減少傾向にあるものの、不登校児童生徒は６年連続の増加となっています。不登校の要因は、「無気力、不安」「生活のリズムの乱れ、遊び、非行」となっており、不登校児童生徒への支援に当たっては、チーム学校による魅力ある学校づくりを推進することや早期発見・早期対応することが必要であるとされています。

このような中、県では、昨年度から進めている「ぎふ　いのちの教育」や「ＳＯＳの出し方教育」を各学校で確実に実施していただくとともに、今年度から新たに「校内教育支援センター」の設置及び充実を図ることで、いじめ・不登校の未然防止につなげていこうと考えています。

■ＩＣＴを活用した授業の充実

コロナで一気に整備が進んだことの１つにＩＣＴ教育環境があります。子供１人に１台のタブレット端末、各教室には大型モニター、子供同士又は先生と子供をつなぐアプリの活用など、５年前には考えられないことです。とりわけ早く整備された恵那市は、学校訪問に伺うと、どの教室でもＩＣＴ機器等を積極的に活用した授業が行われています。入学して間もない１年生児童がタブレット端末を自在に操作している姿は驚きでした。

ＧＩＧＡスクール構想が始まって３年目の今年は、ただ使っているだけではなく、「効果的な活用」が求められています。子供たちがそれぞれもつ疑問や課題に対応できれば、主体的に学ぶ姿を生み出すことができるでしょう。単元の出口の姿をある程度定めながらも、個々の考えや追究方法を大切にすれば、「個別最適化された学び」を創り出すこともできます。

東濃教育事務所のＨＰやリーフレット「授業アップデートwith　ＩＣＴ」を参考に、大いにＩＣＴを活用した授業の充実が図られることを願っています。

R80
古紙配合率80%以上再生紙を使用しています

特集 ICT教育の推進

明智小学校

授業のねらいを明確にし、子どもに力をつけるためのICT活用

タブレット端末の導入から２年以上が経ちました。その間に児童が積極的にタブレット端末を活用する姿が見られるようになりました。「これはタブレットを使った方が分かりやすいかもしれない。」「タブレットを使って全校にお知らせをしよう。」というように、児童がタブレット端末を用いて「伝える」「表現する」力が伸びてきました。本校は、国語の研究をしており、授業での効果的な活用についても取り組んでいます。一人読みでの個別支援や、深めの発問を全員で共有する場面、全体交流で考えを表現する場面などでの活用について研究を進めています。国語以外の教科でもICT機器を活用していますので、その実践を２つ紹介します。

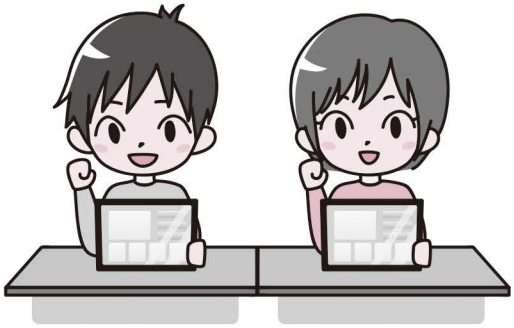
１．５年生　総合的な学習の時間

昨年度、５年生は総合的な学習の時間で「明知鉄道」について学習しました。明知鉄道の魅力や課題だけでなく、自分達にできること等を考え、学習発表会で発表しました。学習発表会の準備では、ロイロノートの共有ノート機能を使い、グループで意見を出し合いながら発表のカードを作成しました。作成後、他のグループと見合う時間を設けたことで、写真や文字の大きさや見やすさに気付くことができました。タブレット端末で発表資料を準備したことで、児童は訂正する点をすぐにその場で直し、発表内容や表現をよりよいものにすることができました。今年度６年生になり、委員会活動の発表で全校に向けて見やすく分かりやすい発表をしている姿が見られました。昨年度の学びが活かされていると感じました。

２．特別支援学級での個に応じた支援

特別支援学級では、「視覚からの情報が優位」「人前で発表することが得意」という児童の特性を活かして、ICT機器を活用した授業を行いました。その結果、畑で育てている野菜を写真で記録し、葉や茎が大きくなっていることを振り返ることができました。また、国語「ローマ字」の学習ではロイロノートのカードをフラッシュカードのように使い、ローマ字の読みを身に付けました。その後タブレット端末を使った学習を児童がプレゼン資料を準備し、児童自身の学習について授業参観等で発表しました。写真のどこを見てほしいのかをズームしたり、指示棒でテレビ画面を示したりしました。児童にとって、とても自信がついた活動となりました。

ICT機器を活用することは、使用することが目的ではなく、子どもに力を付けるために、学習のねらいにせまるためのひとつの手段です。授業のねらいを明確にして、ねらいを達成するためにはICT機器をどの場面でどのように使用したらよいのかをこれからも考えていきたいです。



特集 ICT教育の推進

上矢作中学校

上矢作中学校　ICT活用授業

【合同短学活での遠隔交流教室の活用】

上矢作中学校では、串原中学校との合同朝の会と帰りの会で遠隔交流教室を活用しています。両校とも小規模校であるため、生徒が多様な意見や考えに触れられる機会をより多く得られるように取り組んでいます。毎週１回は朝の会、帰りの会をZoomでつなぎ、合同で行うことを基本として進めています。一昨年度からスタートし、スタート時は各教室のモニターを通しての交流でしたが、昨年度からは、より大きな遠隔交流教室のマルチディスプレイを通しての交流で、相手の様子がより分かりやすくなり、生徒達が相手をより身近に感じられるようになりました。また、スタート時は、「まずは慣れる」ということから始めたこともあり、どうしても形式的になってしまう傾向がありましたが、現在では、レクリエーションや、１分間スピーチを交えるなど、教師や生徒のアイデアでよりよいものになってきています。

【教科での活用】

〇国語

プレゼンテーションの単元にて、ロイロノートを用いて資料を作り、それらを示しながら話す活動を行いました。また、明智中学校とのZoomでの交流を設定しました。より多くの人の前で発表したり、お互いに評価し合ったりすることで、少人数では得られない学びを得ることができました。

〇数学

まとめの提出をロイロノート上で行っています。教員側は、生徒の学習到達度の把握がしやすく、また他の生徒に紹介するときに役立っています。また、家庭学習として、A工型教材Qubena（キュビナ）を活用しています。取り組み状況は時折画面に写すことで、家庭での活用を促しています。

〇理科

単元の振り返りの時間に、共有ノートを活用しています。その単元で学んだことをテキストで書いて、共有ノートにカードを貼り付けます。仲間の貼り付けたカードを読み、内容ごとにカードを移動してまとまりを作っていきます。この活動を通して、仲間と学びを共有しながら、単元の学習全体を広く振り返ることができます。

〇社会

毎時間の導入で、ICTを使って資料を提示しています。導入で写真やグラフを示すことで、子どもたちの中から疑問が湧き、それを本時の課題へとつなげています。また、まとめの提出をロイロノートで行うことで、生徒の学習到達度を確認できるようにしています。

〇英語

「比較級」の単元にて、身近な話題について比較する活動を行いました。それを全校生徒に調査をするために、ロイロノートのアンケート機能を活用しました。また、プレゼンテーション資料はカードを組み合わせて棒グラフを作成し、資料を示しながらプレゼンテーションを行いました。

話すことの発表では、発表したあとに生徒自身が自身の発表を客観的に聞くため、また教師が評価をするために音声録音機能を使いながら会話する活動を行いました。また、プレゼンテーションなど相手意識をもって話すものに関しては、動画撮影をして記録に残しました。

【特別支援学級での活用】

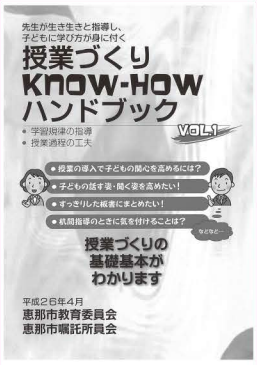
国語の授業では、授業の内容をロイロノートのテキストでまとめて送り、２学年分まとめて指示を出しています。また、本文をすべてスキャンしておき、資料箱に保管して、いつでも自由に使えるようにしています。

「授業づくりKnow−Howハンドブック」をご活用ください

「授業づくりKnow-Howハンドブック」は、年度ごとに設定したテーマについて、恵那市の教育実践をリードする先生で構成された授業力向上委員会（嘱託所員会）でまとめていただき、パンフレット形式の冊子にしたものです。

この中には授業づくりにおける基礎的・基本的な指導方法や指導技術、指導についての見方・考え方が詰まっています。ご自身の授業力を高め、子どもたちに力を付けていく授業づくりの参考として、ぜひご活用ください。

VOL.1
学習規律の指導・授業過程の工夫（平成25年度）

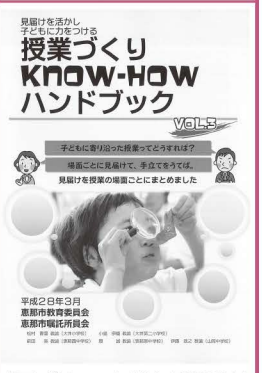


導入の工夫、聞き方・話し方の指導、板書の工夫、机間指導のポイントなど、授業全般のノウハウを紹介

VOL.2
深まりを生み出す指導（平成26年度）

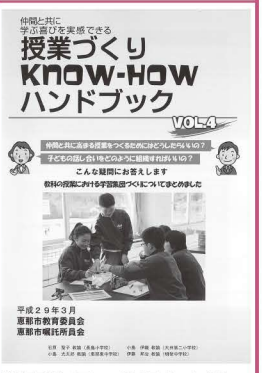
授業に深まりを生み出すために授業の前半で押さえておくこと、後半の発問や交流の在り方を紹介

VOL.3
3つの見届けを生かす（平成27年度）



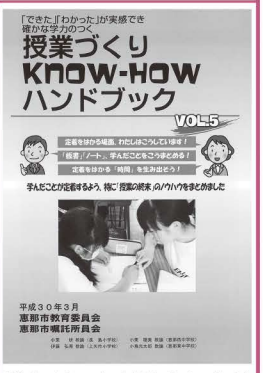
「子どもの実態」「学習状況」「定着」の見届けの生かし方を、授業の場面ごとに詳しく紹介

VOL.4
仲間と共に学ぶ集団づくり（平成28年度）



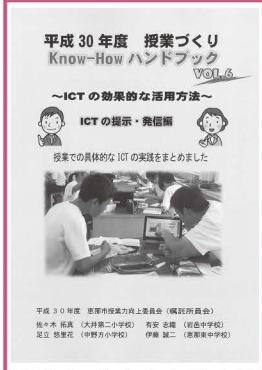
学習集団の様相や実態のとらえ方、学び合える集団の育成、話し合いの組織化、教師の価値づけなどを紹介

VOL.5
学びの確実な定着を図る（平成29年度）



学んだことが確実に定着するための授業終末の在り方、まとめの時間を確保するための時間配分などを紹介

VOL.6
ICTの効果的な活用（平成30年度）

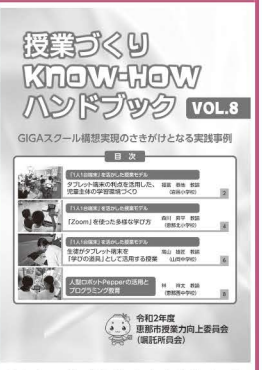


視覚化・焦点化を図る教材提示、GIFU　WEBラーニングの活用等、具体的なICT活用の実践例を紹介

VOL.7
ICTを活用した協働学習の在り方（令和元年度）

教材提示、端末活用、環境設定、単元構想の面から、ICTを活用した協働学習の在り方を紹介

VOL.8
GIGAスクール構想のさきがけとなる実践事例（令和2年度）

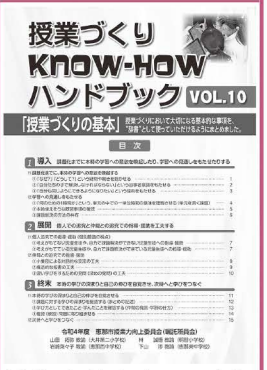


「1人1台端末」を活かした授業モデル、人型ロボットPepperの活用とプログラミング教育について紹介

VOL.9
「GIGAスクール元年」における効果的なICT活用実践事例（令和3年度）

タブレット端末を授業の中で「効果的」に活用し、学習効果を高める方法について紹介

VOL.10
授業づくりの基本（令和4年度）



授業づくりにおいて大切になる基本的な事項を"辞書"として使えるように紹介。

過去に発行された「授業づくりKnow-Howハンドブック」は、各校に配布済みですが、恵那市内のすべての先生方にいつでもご活用いただけるよう、PDFデータを以下の場所に格納してあります。

データ格納場所　**Qドライブ→教育研究所→16授業づくりKnow-Howハンドブック**

また、今年度はvol.11として、「授業づくりの基本～「指導と評価の一体化」の視点から～」をテーマとしてリーフレットを作成する予定です。「タブレット端末を効果的に活用するために、『授業づくりの基本』を大切にして欲しい。その中で、ＩＣＴ機器を使いながら『指導と評価の一体化』をどのように行っていくか。」どの教科でも使える汎用的な視点を大切にしながら、嘱託所員の専門教科で具体的な実践例をご紹介する予定です。令和６年３月に発行し、各学校にお届けします。

こども園の特色ある活動

「健康な心と体をめざして」
～異年齢との関わりを通して～

上矢作こども園

上矢作こども園は、恵那市の南東部を構成する地区であり、面積の95％が山林です。町内を矢作川の支流が流れ、河川に沿って集落があるとても自然豊かな地域であります。ここ数年は上矢作在住の出生児がおらず、年々園児が減少し、今年度は３歳以上児を１クラスにして異年齢保育を行っております。しかしながら、異年齢で活動することが増えているにも関わらず、関わりが薄かったり、友だちに対して強い口調で話したりなど気になる姿が見られることがあります。又、自分の思いを言葉にすることが難しかったり、自信がなく行動を起こすことに抵抗があったりする子もいる為、異年齢と関わりながら様々な経験をすることで、豊かな心が育まれるのではないか、普段の生活の中で小さな成長も褒めて認めていくことで自信が持てるようになるのではないかと考え、「健康な心と体をめざして」というテーマで保育を行っております。

①　様々な人との関わり

園ではなかよしペア（異年齢のペア）を作り、散歩や集団での活動の中でいつも同じ子と手を繋いでいます。毎回同じ相手なので、大きい子は責任感をもって接し、小さい子は慣れた相手で安心できるようになり、異年齢での関わりが密になるのではと思い、なかよしペアで活動をしています。また、地域の方との関わりも大切にしています。コロナ禍で交流が途絶えていた『寿限無の里』（高齢者福祉施設）との交流も再開し、子ども達が普段やっている体操を披露したり、お年寄りの方との触れ合いを楽しんだりする機会を作っています。その他に、壮健クラブの方々の御厚意で、一緒にさつまいも掘り体験をしたり、澄ケ瀬やなに招待していただき、川遊びと美味しい五平餅と焼き鮎を食べたりと、地域の方々に見守られながら楽しい体験ができています。

②　健康な心と体づくり

健康になるためには体作りが大事だということで、体を動かして楽しめるように、散歩や異年齢での触れ合い遊び、集団遊びの年間計画を立てて実施しています。６月10月には体力測定をし、変化を見る予定です。心の健康のためには、普段の生活の中で、自信がもてるような関わりや言葉がけを意識したり、命の授業を通して人の気持ちを知る機会を作ったりし、相手のことを考えながら接することができるようになることを目指しています。

③　家庭との連携

昨年度、情報モラル教室を園で行い、３歳以上児の保護者の方とICTとの関わり方について学び、その中でゲーム依存症の怖さを知り、幼児期からの家庭での親子の触れ合いの大切さを改めて考えさせられました。今年度も親子ふれあい週間を設け、メディアを控え、親子でふれあい遊びや絵本の読み聞かせ、お手伝い等ができるように取り組んでいます。

様々な取り組みを通して、子ども達が自信をもって積極的に行動ができ、異年齢や地域の方々との関わりを通して思いやりの気持ちをもてる子になるよう、保育内容を考えていきたいと思います。

温故知新★ ONKOCHISHIN

心に残る遊び・授業・先輩・職員

子ども自身にとっての課題を設定すること

飯地小学校　校長　福井　敏彦

私の教員スタートは小規模の中学校です。初任１年目は専門教科でない女子の体育を受け持ち、恥ずかしい指導をしていました。その一つ、跳び箱運動の指導は今も心に残っています。

個人差の大きい集団でしたが、当時の私は「全員跳び箱○段が跳べるように」と目標を設定して指導していました。「跳べなかった子が粘り強く練習して跳べるようになった姿をみんなで喜び合いたい。」そんなシーンをゴールのイメージとしてもっていました。実際、生徒はよく頑張って取り組んでいたので、私の願いはますます強くなっていきました。

真面目な性格で何でもコツコツと努力できるA子さんは、跳び箱に苦手意識をもちながらも、持ち前の粘り強さを発揮し取り組んでいました。しかし、あれこれと手立てを工夫し取り組んでも、どうしても跳べません。跳ばせることができない私自身へのいらだちがA子さんを追い詰めていました。

ある日の授業中、A子さんは泣きながら私にこう語りました。「どうして跳び箱を跳ばなくちゃいけないのですか？」と。そう問われ、一瞬言葉が出ませんでした。「跳び箱運動がカリキュラムに位置づいているから」が回答になっていないことは明白です。「跳び箱が跳べなくても困らないですよね。」というA子さんを説得・納得させる言葉はもっていませんでした。

跳び箱運動では「○段跳ぶことができる」といった目標はありません。自分の能力に適した開脚跳びや台上前転などの技を身につけ、跳び箱の楽しさや喜びに触れることができればよいのです。跳び箱の楽しさや喜びを伝えることを考えたなら、○段跳ぶことだけにこだわらなくても課題設定はできたはずでした。

以後、ねらいを踏まえ「子ども自身にとっての課題が設定できているか」は私の大切なテーマとなりました。「今回は難しいな」と思ったときこそA子さんの顔を思い出し、あきらめずに考えるようにしています。

研究所NEWS

恵那市幼保小連携の現状

幼児教育課　主幹　各務　恵美

恵那市には5歳児が通う公立こども園14園（うち指定管理３園）、私立保育園２園、私立幼稚園１園があります。

2017年３月に幼児教育の要領・指針が改訂され、それまでは、保育所、幼稚園、こども園（以下は園と表記）の幼児教育の指針となるものは、それぞればらばらに作成されていましたが、この改訂で保育園の保育所保育指針、幼稚園の教育要領、幼保連携型認定こども園の教育・保育要領の３つが整合性を確保し、幼児教育に関する記載が同じ内容へと変更されました。

その中でも幼児教育において育みたい資質・能力（知識及び技能の基礎／思考力、判断力、表現力等の基礎／学びに向かう力、人間性等）と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿は、園と小学校の共通理解が必要です。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

1.健康な心と体　2.自立心　3.協同性　4.道徳性・規範意識の芽生え　5.社会生活との関わり　6.思考力の芽生え　7.自然との関わり・生命尊重　8.数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚　9.言葉による伝え合い　10.豊かな感性と表現（到達すべき目標ではない）

小学校学習指導要領（2017年３月告示）総則には、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること（以下省略）。と記載されています。

園では、この10の姿をキーワードとして小学校教育への円滑な接続を見据えながら、「接続期カリキュラム」を作成しています。幼児教育は園児の生活リズムを基本として、遊びや体験（興味・関心に基づいた体験や友達と楽しみながら関わる活動）を通した活動を中心としています。

一方、小学校では、幼児期の遊びを通じた総合的な学びが学校生活や各教科の学習などに円滑につなげられるように「スタートカリキュラム」を作成、実践しています。小学校教育は学習を基本として、教科（国語・算数・理科・社会・生活・外国語活動及び外国語・家庭・音楽・体育・図画工作・道徳等）ごとの学びを中心とし、教科等の時間割を作成して、学ぶ時間を１単位45分としています。

実はこの時間（一単位45分）で区切る生活や学習の指導形式についていけない児童（入学直後）が増えているように思います。環境の変化に対応できないまま「授業中、学習に集中できずに寝てしまう。」「話を聞いていられず、教室から出ていってしまう。」といった行動もあるようです。

園から小学校へ接続をより円滑にするには、園や学校が作成している「カリキュラム」の見直しを進めることが重要だと考えます。見直しのヒントは、園と小学校が互いに見学し合って園児と児童の姿をよく観ることや、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について園の捉え方、小学校の捉え方を協議する機会を計画するなどして幼児教育と小学校教育の内容を理解し合い育ちのつながりを考えていくことだと考えます。

令和５年度の園と小学校の連携計画には、園児が小学校へ行き、休み時間等に一緒に遊んだり、また一方で小学生が園へ行き、幼児や園児に読み聞かせしたりという子供達による交流活動や教師側の「接続・スタートカリキュラム」についての交流活動も増えています。教育委員会は園と小学校の円滑な接続に向けての連携強化をサポートしていきたいと考えています。

参考文献
小学校学習指導要領
幼保連携型認定こども園教育・保育要領
岐阜県幼児教育アクションプラン【改訂版】
「ぎふっこ」すこやかプラン